



川村 喜久
DICグラフィックス
取締役会長

グローバル経営の恩師

1986年にDIC（元大日本インキ化学工業）は、米国サン・ケミカルを買収する。当時の円貨換算で、850億円、DICの資本金の2倍以上の買収だった。この買収で、DICのインキ部門世界シェアは13%となり世界トップに、顔料部門でも13%となり世界3位となった。この買収の最大の条件は、経営路線の対立から外部に出ていた、サン・ケミカルの元インキ・顔料事業部門のトップであったエド・バーを復帰させることになった。私は1991年に米国のDIC Trading USAに出向し、DIC製品の販売を担当した。ニューヨーク大学でMBAを取得後、サン・ケミカルのCorporate Business Development部門で、業界・顧客・競業の分析レポートを各事業部門トップに送る仕事に従事した。私の米国時代に公私にわたって大変お世話になり、薫陶を受けたのが、このエド・バーである。

バーの経営哲学は、「部下と徹底的に議論し、双方が納得したとき、初めて自分のオーソリゼーションが有効になる」と

いうもので、特に予算会議は有名だった。得意先ごとに売り上げ実績、予算を徹底的に検討する場で、時として空が白んだということがしばしばあった。そのためにも、バー自身で可能な限り得意先を訪問し、先方の情報を集め、それを持って研究所を訪れ、技術部門の対応状況を把握していた。バーは積極果敢なM&Aを駆使し、ヨーロッパやアジアの事業領域を拡大、DICのグローバル事業の地歩を強固なものにしたが、彼の貪欲な拡張主義は新しいDIC経営陣の理解が得られず、関係が悪化して会社を去ることになったのは誠に不幸なことであった。彼なくして、DICのグローバル化は決して成し得なかった大恩人である。

この写真は、私が2012年にサン・ケミカルの会長に就任した際、息子のエド・バージュニアと共にお祝いをしてくれたマンハッタンのハーバードクラブで撮ったものである。



（左から）エド・バージュニア、エド・バーとハーバードクラブにて



エド・バージュニア夫妻（左）、妻（右端）とニューヨーク大学のレセプションにて